

## だじやれのカッパ

小一・さえき ゆずは

ある日、みずうみのそこから、だじやればっかり言うカッパがでてきました。しようにんがいに、きゅうりをかいにいくのです。

そのカッパにとって、だじやれは、ごはんでした。だじやれをいうと、カッパのおなかはどんどんふくれ、おなかがいっぱいになるのです。

カッパは、だじやれがだいすきだったので、いつも言いすぎて、たおれそうなくらいおなかをふくれていました。

そこで、だじやれをガマンして、しようにんがいにきゅうりをかいにいくことにしたのです。

しようにんがいにいくと、いろいろなものがならんでいました。カッパは、そのなかからだいにんきのきゅうりをかいました。そのきゅうりは、とてもとてもおいしくって、いちどたべると、ずっとたべつづけたくなるとひょうばんなのです。

カッパは、みずうみのはしっこで、きゅうりをたべました。おいしいけれど、まだまだおなかはすいています。あんまりすいて、カッパは、だじやれを言ってしまいました。

「パイナップルがいっぱいなプール」

「クレヨンでかいてくれよん」

「ニンジャはなんにんじゃ？」

そこに、おんなのこがきました。そのおんなのこは、ゲラゲラッ

---

とわらいました。

「あんだ、だじゃれずきのカッパねえ」

「ケケツ」

カッパは、

「ぼく、だじゃれカッパ」

といました。

「それなら、わたしはだじゃれガールよ。みんな『だじゃれちゃん』  
ってよぶの。あなたもそうよんでいいわよ」

「だじゃれちゃん!! つぎのげつようびに、またここにきてね。そ  
したらふえをあげる。ふえをふいたら、いつでもあいにくるよ」

だじゃれちゃんは、

「ありがとう」

と言いました。

げつようびになり、ふえをもらったおんなのこは、そのご、なん  
どもふえをふきました。

おんなのことカッパは、あうたびに、やめられなくなるほどおい  
しいきゅうりをたべ、だじゃれをいいあいました。

カッパは、おんなのこと、あんまりたくさん、だじゃれを言った  
ので、おなかは、いまにもパチンとはじけそうなくらい、ふくれあ  
がりました。

カッパのおなかをしんぱいしたおんなのこは、とうとうこう言い  
ました。

「いいかげん、だじゃれはやめなしゃれ」

---